

作文教育についてのレポートⅢ

竹内頼夫

七 身体の成長に思考の成長を伴わせる

作文指導は以上で終わったわけではない。基礎的な「語法」の指導ももちろん続けなければならない。誤字の訂正も根気強く続けなければ、概括的な解説だけで一朝一夕になくなりはしない。文末の「だ」「です」「であります」もどれかに統一させねばならない。だが、これらの指導を続けながらも、それと並行して、「生活の拡充」を目指しての指導を続けなければならない。生徒たちの身体的な成長にはすばらしいものがあるが、それに思考の成長を伴わせるのが私たちの務めであろう。思考の成長が身体の成長に取り残されたなら、そこには社会的な不具者が生まれてしまう。私たちは社会的な不具者を生み出すことを最も恐れねばならない。

昭和三十五年度の一年生の「現代の世相をこう思う」という作文を読んで、私は「このまゝではならない」と強く感じた。それは、勤務評定の問題や安保闘争の問題、核兵器の問題や選挙のこと、あるいは青少年の犯罪のことなど、なかなか広範囲に関心を持ちながら、結論が爽にせつかちなのである。思考が単純でもある。むしろ、思考はしばしば飛躍しているのである。現状の把握は新聞記事

的なところに留まり、平和・幸福・自由への祈りは、観念的なまま、容易に結びつかないまま、結びのことばになっているのである。思考の飛躍、あるいは中絶の行く先がどこであるか、私たちは傍観的であるべきではない。私たちは今少し啓蒙的であるべきだ。更に警戒し、用心深く指導しなければならないのは、世相批判の文章を投げやりに書きちらす生徒たちである。それは、「怒れる若者たち」ということばに酔い込んでいく生徒たちでもある。そこには誤まれる正義感すらない。だから、それらの少数には殊に思考への糸口を与えるように批評のことばも考えねばならない。二年生三年生と順を追って、自己を見つめさせ、社会を考えさせ、それらの間を往復させながら社会の中の自分を把握させる材料を与えねばならない。少なくとも、現代の世相が青少年の性急な気質をなお一層助長しているなどと嘆いても何も生まれては来ないだろうから。生徒たちは、ことさらに書かせなくても、ある程度の思考の成長を見せはする。つまり思考の成長にとって書くことだけが方法ではない。読むことも大いに奨励すべきである。しかも教科書の単元・教材の配列にはそれぞれの面での工夫がなされているのである。ただし、読んでわかったかと思っていることでもそれを書いてみると爽

際にはわかっていないことが多いのである。いわば、思考の入口をおいをかいただけで通り過ぎている場合が多いのである。だから、私たちはやはり書かせることにより考えさせるという方法をとらねばならない。書かせるということ、不完全だった思考を今一歩突っ込ませることになっているのである。

ところで、入学しての一年間は合格しての気のゆるみと未来の夢とが交錯して、どちらかといえば混沌とした生態を見せている生徒たちであるが、二年へ進むころから、未来のことがかなり現実的な問題となつてき、同時に三年生ほどには進学や就職の問題もせつばつまつては感じられないところから、徐々ながらも自己を見つめ、人生を考える姿勢が生まれてくるのである。だから、私たちはそういう時にこそ、細心の注意を払い、大胆に実践しなければならぬ。思考の成長を押し進める方法は書かせることだけではないと言つたが、それは国語科だけでなされるものでもないのであるから、教科セクト主義は極力排することも必要だ。他教科との関連を考えながら根気強く指導しなければならぬ。手数はかかっても、場合によっては個別指導にまで及んで行かねばならない。

一年から二年へ、そして三年生へと段階を追って指導して行くとき、作文指導の上で最も貴重な三年目という一年間を、いわば手段のための学習になつてしまいがちな傾向があり、非常に残念である。それは、誇張して言えば現代の悲劇である。私自身は、今まで三年生には強いて書かせないという、迎合的な態度をとつてしまった。もちろん、現代のシステムではやむを得ないなどと嘆いたりあきらめたりはしない。その悲劇を乗り越えるだけの勇氣と才能が欲しい。

八 評語を書くこと

正直に言つて、作文指導の中で「評語を書くこと」が最もむずかしい。

私は、初めは、舌足らずのもどかしさを感じながらも、その半面でも行なっていないことをするという誇りもあつて、勢いこんでやっていた。確かに効果はあつたと思われた。生徒との間にもすればできがちな疎遠感もそれらの短いことばによってなくなり、甘えるにしろ、抗議するにしろ、言い寄つて来る生徒が徐々ながら増して来た。しかし、添削し短評を記して一度返し、再度集めて整理保管することを繰り返しているうちに、短評のあちこちに傍線や疑問符号が記入されているのを発見して驚いた。安易さは避けねばならないと教えられた。それは次のような評語であつた。

小説の創作を試みきたね。大いに結構です。ただよほど細心の注意を払つた上での大胆でなければなりません。根気強くなければなりません。技術面で一言いうなら原稿用紙の使い方も雑にしないこと。またたとえ短いものでも構成はじっくり考えて下さい。

相手は女生徒であつた。文章はかなり達者な方であつた。この短評のうち、「根気強く」という所に傍線を引いて疑問符が打つてあつたのである。その他、「大胆」「構成」「原稿用紙の使い方」という個所に傍線が施してあつた。「大胆」とか「根気強く」とか、甚だ抽象的で、それだけにイージーなことばであつた。それにしても生徒たちは（すべてではないとしても）予想以上に真剣に読んでくれると言えよう。中には、注意した箇所を訂正して出している者もかなりあつた。それだけにいい加減な気休めの評語を書いてはな

らないのである。たとえ忙しくても、また原稿用紙に書く余白がなくとも、弁解は無用と覚悟して書かねばならない。私は、そう自分自身に言いかけようになつたのである。

評語を書く態度としては、森久保仙太郎氏が言われるように（注6）

一・はげましの評語から始める。

二・書かれている生活を導く評語を書く。

三・表現力を高め、ことばに対する感覚を鋭くするよう、評語を書く。

四・各学年の段階により、個々の生徒により評語を工夫する。

という注意・心掛けが完全に払えればまず十分だと思う。だが、具体的にいざ書くとなるとやはり難儀だ。第一に相当な時間を必要とする。それは、一学級五十数名の生徒が三ないし四学級で、一人平均三枚としても四百五十枚の原稿となり、評語を書くとするればそれらのすべてをみっちり読まねばならないからである。（繰り言になるが、私たちは作文だけを指導して専足りるというわけにはいかないのである。）第二に、「こんな評語を書きはしても、それでは自身に模範的な作文が書けるか」といふ甚だ疑わしい」といふ気持ちが常に動くということがある。もっとも、批評と創作とは性質を異にするものであるから、私は極力そのような気持ちは捨てるよう努めては来た。

さて第三に、「はげましの言葉から始める」としても、「よく書きました。えらいなあ。もっと書きましよう。」などという気安めのお世辞は高校生には通用しない。それが通用するような生徒には別な面からの、成長を助ける指導が強力になされなければならぬ。

い。私はやはり、高校では「はげますことを怠らせずに努めること」も必要ではあるが、むしろ、「書かれている生活を導く評語」に重点を置くべきだと思う。そのことが、次々に書く意欲をそそることになると思う。

授業をサボって先生から叱られた時の様子を生き生きと描いて、その時の気持ちを次のように記した生徒があった。

（文例い）僕はとっさに言い訳が頭に浮かんだ。僕は保健室に行っていたと答えた。僕に都合のいいことに、保健室へ行くように連絡があったことは先生も知っていた。僕だけ打たれなかった。しかし、ほっとした気持ちよりも、小器用にウソのつけた自分への、たまらない憎悪が少しづつ湧いて来て、自分の顔に醜い自嘲の薄笑いが浮かぶのを感じた。これは高校一年の時の思い出である。（二男・H・K）

私はこの文章の冒頭に、「先生は何の為にこうまで作文を書かせるのですか」と書いておったところから、次のようなことを記した。

何故書かせるか——書かせる前に書いて欲しいのだ。君たちは書けるんだし、書かねばならないんだ。現に君もこれだけ書くことによつて、少なくとも過去の自分からは脱皮して、々えらく、なっているではないか。

私は、このK君が、実際にその時自己憎悪を感じたかどうかは問題にしなかった。書きながらそう「考えた」としても、それが偉いと賞めてやりたかった。その後K君は何ら憶することなく書いてみせ

るようになった。それも、私に面と向かってせひ読んでもらいたいと言わぬばかりにである。やがては、末尾に、「先生の御意見をぜひお聞かせ下さい」と追記することさえあった。そしてまた、校内の注意人物として見られがちだったのが、改めてきたのである。しかし、こういう生徒ばかりがいるわけではない。先に挙げた文例ホのK君の場合もある。「私にも経験がある。まけるな。根気強く押して行け。」などと、あまりにも真つ正直にしかもしやれた文句で、若さから来る未熟さを暴露したこの評語は、後には次のような文章に出くわすことになってしまった。

(文例3) 彼は短気者だ。若いせいか爽に落着きがないように感じられる。彼がこういう態度では教師としては零だ。しかし彼が熱心であることから来ることは認められるだろう。もう少し教師たるものは心を大きく持ち、生徒の下品な野次や冷やかしのど、笑って受け流すようにしたらと思う。

また彼は独身のせいか女性には甘く、愛敬がありすぎる。これも生徒から嫌われる原因の一つだろう。殊に思春期の我々を目の前においてだ。

また彼は我を出しすぎる。この頃は少しは減ったけれど、とにかく彼は、「自分は苦勞して学校を出たんだ。なんだお前らは遊んでばかりいて。もし勉強したらどうだ」と、生徒を軽べつした態度が表には出ないが、裏に微妙な様子で、自分にはそう感じられる。(二男T.K)

私はこの文章に対して言い開きをしたことも相当あった。實際

に、女生徒の数名から、「男子ばかり引き寄せている。独身だからといって、噂を恐れているのだろう。卑怯だ。」と責められたことさえあった。ただ、「短気者だ。もつと心を大きく持て」という忠告は、くやしかったがありがたかった。また、自分では激励のつもりで言った言葉が軽蔑と誤解されているということも教えられるところがあつた。とにかく、私はこの文章には、文中に「青年期の我々は反抗するのが当たり前だ。」とあつた所に、「わかつていて反抗するのは甘えているとは言えないだろうか。青年期だから」といつて当然の権利のように主張するのは正しくないと思う。」と記しただけで、末尾の評語は書かなかつた。代わりに、後日ひそかに呼んで詫びを言い、話し合つた。彼は卒業後就職してから理解してくれたようであつた。(先に引用した手紙を参照されたい。)

以上から私は、勵ましの評語から始めなければならぬとして、やはり精神的な(肉体的にも)成長の段階に即して、また個々の生徒の氣質も呑み込んだ上で書かねばならないと思うのである。しかし、それにしても、百五十人から二百人に及ぶ生徒を、一人一人知り尽くすことは、根気とか情熱だけでは不可能なものがある。このことが、具体的に評語を書く場合にはたと困惑する第四の問題である。もちろん、その文章をしっかりと読めばその筆者の人格もある程度は理解されるが、それはどこまでも「ある程度」であつて「全て」ではない。

だが、私たちは苦痛に堪えて書かねばならない。「そこに書かれている生活を導く評語」。「表現を高め、ことばに対する鋭い感覚を養う評語」を書かねばならない。その時、少なくとも、森久保氏も言われているように、「よく書けた」とか「きたないよ」という

概念型の評語や、「もっと長く」「もっと詳しく」などという、読まなくても眺めただけで書けるような評語は書かないようにしよう。どうしたら長かつぶり書けるか、どこをどのように詳しく書いたらよいか、方法を示すことを先に心掛けよう。また、生徒の心と触れ合う大事な接点となる評語だからというのでよくやりがちな同情型の評語、例えば「ずい分悲しかったでしょうね」とか「その気持ちにはよくわかります」なども避けねばならない。あくまでも、新しい生涯を拓いて行く示唆となる評語をと心掛けよう。また、「兄弟げんかはやめよう」とか「お手伝いをよくしてお母さんを喜ばせてあげましょう」などという、底の浅い身上相談型の評語も避けよう。生徒たちをだまして済まされるものではない。お世辞も皮肉も生徒たちには禁物である。私たちは何よりも生徒たちの作品をよく説もう。力説している点に共鳴しよう。そして、足りない所を共に悩み、共にその解決の道を探してやろう。

完全な評語を書くには、やはり完全な人間であることが必要である。私たち自身が不完全であることを知って、その上で完全へと志して努めることが、何よりも必要である。私たち自身が模範的な文章を書きえなくとも、よき読み手であり、よき理解者でなければならぬ。作文だけを読んでいては視野の狭い評語しか書けない。常に博説と精説とを志して行かねばならない。そして静かに哲学する人間でもあらねばならない。また、生徒と共に行動して、常に若々しい情熱を失わないことも大事だ。そこで、教員の配置といい、学校設備といい、あらゆる面から教育環境が整備されて、作文など一気に通せるようなゆとりのある生活が望まれる。金銭の徴収とか、教育実践には縁遠い行政上の調査統計などにわずらわされずに

すむ生活、また内職などによって瘦せる思いをしなくてもすむ生活が欲しい。そうした生活の中で、読み、考え、生徒と共に動き、たゆまず自己を鍛えて行きたい。自己を磨くこと、それが立派な評語を書くための、遠いけれども最高の条件であると思う。

「考えがまとまっていない。もっと考えることが必要。」

「よろしい。ただし、こうした理論的な文章ではもっと説得力を持たせること。それには構想を練ること。」「少々単純で、そのため結びの大きな言葉が生きて来ない。」

「ことばにあやつられないように。逆にことばを駆使するように。」
……など、など。

こんなお粗末な、不親切な評語を書いたのは忙しい最中であつた。更にひどい時には、ことばの技術についての添削が精一杯で、評語など書く元氣も出なかつた。

「一枚なら仕方ないかもしれないが、もっともっと書かねばならないこともあつたらう。例えば、一致しないが父の意見は大事だ」というあたり、どういう意見なのか、何故大事なのか、などを書くのだ。」

というふうな具体的なものはいくつくり説めた時に書けた。

「自己を見据える時、殊に現代の社会における自己を見据える時、苦しい。ともすれば君の言うようにやりきれない気持になるだろう。けれども挫折してはならない。考えながら毎日毎日の学習は努めてもらいたい。社会は人間が作るものだし、殊に青年は、作られている社会を更に新しく作りうる力を持っている。その力をやがて發揮するために、今の今を確実生きたいという実感を持って行かねばなるまい。」

「よろしい。これでいいんだ。ただ、ニヒルな気持を悟ったら、いつまでもそこに留まらぬよう努めて欲しい。誰に治してくれと頼むべきものではない。若いんだし、自分でやらなくちゃだめだ。」

などという、未熟で曖昧な評語ではあるが、相手を知っての、相手に調子を合わせての、精一杯の「勇気づけ」を行なったのも、精神的に余裕のある時であった。そういう時には文中の脚注・傍注なども精密にしてある。

「抽象的に物事を考える態度を君が持ったことは君の将来にきつと有益なものとなる。お世辞でなく嬉しい。ただし、論理を進める場合、もっと整理する必要がある。少くとも相手に理解させ納得させようとするためには。君のこの文章では、所々結論が先にあつて、そこへむりやり引つ張って行く進め方が見られる。傍線部がそれ。考え抜いた上で出て来た結論こそ尊いのである。

(瞬間にひらめいて出たアフォーリズムは案外もろいものだ。) 文章に表わす場合、その緻密に考えた論理を整然と一つずつ、たぐりだして行けばよいのだ。」

というふうに、長々と念を押し得たのも、肉体的にも精神的にも余裕のある時であった。忙中であれば「構想を練れ。緻密に論を運べ。」で済ますところであつただろう。「構想を練れ。緻密に論を運べ。」というわずか一行の評語で、その生徒が「よし、それではこの次には緻密に書いてやろう。」という気を起こすなら、おめでたいと言わねばなるまい。

ともあれ、生徒たちの前ではいかなる弁解も通用しないのである。

九 作文を生かすこと。

作文を書くことにより、ことばに対する感覚が鋭くなり、表現力が高くなることは言うまでもない。だから、それは、各科の記述式答案の作成にも生きてくるはずである。しかし、実際は、この面ではどの教科の教科からも懸念ばかり聞かされている。真に「ことばへの愛情」が身につけていないのか、あるいは試験の時にはまた別な神経が働らくのか、あまり役立っていないようである。しかし、生かしうることではあるし、生かさねばならないと思う。

また、書くことにより、「物の見方・考え方・感じ方をより確固たるものになし得るのは確かだ。「書くこと」はそのまゝ、「考えること」になつて行くのであるから。今まで私が作文指導を行なってきたのも、すべてそのねらいからであつた、今まで述べてきたところはその実践の跡であつた。

ところで、作文はもっと他に、むしろ思いがけないところで生かすことができるのである。

△その一▽生徒の実態をつかみ、指導上の問題を把握することができる。

私はまず新入生の作文によって、次のような実態を把握した。

(1) 漢字の書取り練習はよくやらされたと言いつながら誤字の多いこと。(「漬物」を「積物」、「案内」を「安外」、「百姓」を「百姓」等。)

(2) 文法的に正しい表現も十分に出来ない。

(3) ことばの使い方が乱暴である。(方言の使用や敬語の誤用において特にそれが言える。)

(4) 原稿用紙の使い方に習熟している者も少ない。

そこで、その後の教科指導計画にさっそくそれを活用した。

(注) 原稿用紙の使い方は、その後高校入試に出題されて、以来、高校入学までに一応学習して来るようになった。))

入学当初においては、何によらず、生徒の奥態を知ることが必要であるが、その際、真正面から「自己の国語学習をかえりみて」などと書かせても、選ばれた少数数であるという意識(誇り)も作用して、とかく飾って報告しがちなものである。けれども、アンケート形式で集計するようなやり方でなく、書かれた文章そのものをしっかり読みさえすれば、いわば「語るに落ちた」彼らのアラがいろいろ探し出せるのである。それはそのまま、以後の指導に役立つのである。

私はまた別表5のように数字で奥態を把握したこともある。私は、この数字からおおよそ次のように判断したものである。

(一) 未提出のことに ついて——一年生では未提出者が毎度五、六%はあるが、二年生になると欠席者を除いて全員が提出する。それも自分から進んで書かねばならないという必要に迫られて書くような書きぶりの者が多い。だが三年生になると未提出者はぐんと増して行く。それは、「書くこと」により救いを得たり、自己を励ましたりする者と、ひたすらに目前の大学の門へ肉迫して行く者とは分かれるためだ、と見ることもできる。

もっとも、表5の(4)は三回とも教室で書かせ、書き上げられなかった者のみ家庭で完成させて提出させたものであった。これが、始めから家庭での課題にすると、表5の(4)のようになってしまふ。

別表5の(4)

与えた課題	選んだ生徒数		
	男子	女子	合計

一年生(昭和31年9月)

「忘れ得ぬ人」	35(人)(35%)	24(人)(45%)	59(人)(38.1%)
「最近の新聞から」	42(42%)	11(19%)	52(33.6%)
「私の不安」	19(19%)	17(32%)	36(23.2%)
(未提出・その他)	5(5%)	3(4%)	8(5.2%)
合計	101	54	155

2年生(昭和32年6月)

「自己を語る」	30 (29.1%)	6 (11.5%)	36 (23.2%)
「愛情について」	27 (26.1%)	4 (7.7%)	31 (20.0%)
「私の父(または母)」	13 (12.6%)	23 (44.2%)	36 (23.2%)
「初夏」	25 (24.3%)	11 (21.1%)	36 (23.2%)
「旅」	6 (5.8%)	8 (15.4%)	14 (9.0%)
(未提出・その他)	2 (2.0%)	0 (0%)	2 (1.3%)
合 計	103	52	155

3年生(昭和33年11月)

「近頃私の思うこと」	24 (24%)	17 (31.5%)	41 (26.5%)
「私の家」	3 (3%)	13 (24.1%)	16 (10.3%)
「ある一日」	4 (4%)	11 (20.4%)	15 (9.7%)
「私とはこういう人間だ」	9 (9%)	6 (11.1%)	15 (9.7%)
「秋」	8 (8%)	2 (3.7%)	10 (6.5%)
「私の生活信条」	4 (4%)	5 (9.3%)	9 (5.9%)
(未提出・その他)	49 (49%)	0 (0%)	49 (31.6%)
合 計	101	54	155

別表6の(ロ)

一年生(昭和35年6月)

「忘れ得ぬ人」	10	20	30
「最近の新聞から」	52	27	79
「私の不安」	29	20	49
(未提出・その他)	41	13	54
合 計	132	80	212

私は、未提出者には、一度だけ、未提出であることを確かめ、「正直者が馬鹿な目を見るようなことだけはしたくない。」とだけ申し渡して置く。強制はしない。

(二) 関心の方向について——まず男子生徒についてみれば、一年では外面的な政治・経済・社会問題に多くの関心は寄せられるが、内面的な「私の不安」を語る者はあまり多くはない。それが二年になると、「自己を語る」と自己の内面へ沈潜するようになってき(約三割)、「愛情について」と合わせて、人間としての本質的な方面に立ち向かおうとする者が半数以上を占めてくる。一方女子は生徒の方では、一年の時はニュースへの関心より「私の不安」を語る者の方が多いのであるが二年から三年にかけて、「家庭」を見つめる傾向が強くなって来るのである。学校全体で特別にそうし向けているのでもなく、殊に(普通科だけの高校ではあるが)「家庭科」の選択者は次第に少なくなりつつある状況の下である。私は、こうした傾向を特別に歓迎するつもりはないし、また特別に警戒しようとも思わない。ただ、女生徒にだって、男生徒と同等に、人間としての幅を広げてもらいたいし、自己の内面へも青年らしく沈潜しても欲しいのである。

次に、男女とも共通に見られる傾向で、抒情的な方面に寄せる関心が各学年ともかなり強いということが言える。一年では「忘れ得ぬ人」というのが比較的抒情味を帯びて書けるものだし、二年では「初夏」「旅」がそれである。知的なばかりの人間では無味なものだし、意地だけに生きる人間も円満ではない。抒情性は人間としていつまでも持ち続けたいものではある。

ただここで気をつけなければならぬことは、生徒たちの抒情的

なものへの関心も、自己の内面への深まりも、事実はかなり寸感的であるということだ。それが、三年生で「近頃思うこと」という課題に集まった数字に表われていると見てよからう。「自己を語る」「愛情について」が、「私とはこういう人間だ」「私の生活信条」へは続いて行かないのである。また、それは、自己の内面を掘り下げていっても、まだまだ「人生観」として固まらず、従って「生活信条」などは書きにくいということでもあろう。早くから固まった人間よりは、むしろこの方がいいとも言えるのだがどんなものだろう。

結局、私は、これらの関心の範囲内でよいから、物の姿・動き・相互関係から価値を見出し、事実を正当に観察し判断する力をつけていけばよいと思うのである。そしてそこから思想・感情を型造るようにならなければならないと思うのである。固定観念や偏見、誤解や独断から解放し、柔軟な頭脳を持った、自由で個性的な自己を型造るようにならなければならないと思うのである。もちろん、日本語への愛情も常に意識つけて行かねばならない。

(三) 思考の深さについて、——数字からの判断は大きかたものであって、右の判断で十分とは言えない。これもまた不完全であるかもしれないが、個々の課題の中の関心の度合いについて見ることがあってよい。

たとえば、「忘れ得ぬ人」(二年)では、十五・十六才のこの年代では、まだまだ人格に触れて忘れられないというような経験は乏しいと言える。経験も少く、人にも多く接していないため、思師や友人について語る者が多いのである。むしろ、「忘れ得ぬ人」との邂逅はこれからである。

<表7の(イ)>

「忘れ得ぬ人」のうち					
恩師について書いた者	友人について	家族または親戚について	先輩・後輩について	見知らぬ人について	小説の主人公について
14人	9人	3人	1人	6人	2人
(男)	(女)	(計)			
4人	9人	18人			
0人	6人	7人			
2人	12人	18人			

「私の不安」では平凡なものが多く、学習上の悩みとか自己の進路（進学か就職か）についての不安を訴える者が大半である。まだまだ自己の内面をじっくり掘り下げることは程遠いものがある。（ただ、女生徒の中に、何のために生きるか、何のために学ぶかと考えている者が二名だけあった。）

<表7の(ロ)>

「私の不安」のうち……					
学習上の不安（主として成績のこと）	家庭の状況と自分の位置	就職・進学など将来のこと	自分の性格について	原水爆など社会に対する不安	その他
7人	2人	3人	2人	1人	4人
(男)	(女)	(計)			
2人	3人	9人			
2人	3人	4人			
4人	6人	10人			

「新聞」のものでは、お座なりなものが多い。なるほど事件は、当時のスエズ問題・日ソ漁業交渉・鳩山内閣のこと・グレン隊のこと・犯罪のこと・心中のことなど、一とおり網羅されているが、

むしろ網羅されているだけにそれは羅列となり、批判は浅薄になっている。中には「天声人語」や「碩滴」、あるいは投書欄から盗んできたのではないかと思われるものさえある。いずれにしろ、関心はあるが批判することは難かしく、単純に賛成とか反対にとどまっている。

とにかく、こうして大づかみにでも生徒の思考の裏態を捉えておくことは大いに益のあるものである。それは、次回の作文指導計画のヒントになるだけでなく、日常の生徒との接触においてかけ離れた発言をなくすることができ、日常の授業にも、ホームルームの指導にも、つまり全体指導に大いに役立てることができるのである。

▲その二〇〃担任としてホームルームの指導にも大いにプラスになる。

私は右のように裏態を大づかみにつかんだ上で、できるだけ関心を多方面にわたらせ、それぞれの思考を深めさせようというねらいから、朝の始業前十分間のショートタイムを工夫してみた。新聞の論説を読んで問題点を指摘したり、『螢雪時代』や『高校コース』の中から大学教授の意見や合格者の手記を抜き読みして杞憂を解消しようとしたり、『一日一言（桑原武夫編）』の中の名言を読んで人生問題についての示唆を与えたりした。こうした試みに対する反応は容易につかめないのであるが、生徒たちが輪番で記す学級日誌に時々、私の一般論を学級の雰囲気にあてはめての感想が記されるようになり、また、「学期始めなのにいつものような担任の話がなくて物足りなかった。」と記されていて、勇気づけられた。その反応はそのまま授業の方にも活気づいてくる結果となって現われ、いわゆる講義式の授業では満足しない生徒も増してきた。

それは国語の授業だけではなかった。

ただ、こうしてホームルームに生かす時、十分気をつけねばならないことは、この雰囲気呑まれてしまう生徒が相当数いることである。また、反発するのか妬むのか、ますます無口になり消極的になり、神経も過敏になりすぎる生徒も現われることである。私たちはやはり全体指導ばかりでなく個別指導も併せ行なわねばならないのである。

他に、事務的な学級日誌とは別に一冊のノートにエッセイを綴らせている担任もあり、かなり成果を挙げていたようだが、それを模倣するとしても、そのエッセイをもとにして互に相互批評させいかに高めて行くかは大事な問題であろう。

私はまた、担任クラスの授業を持たない教師からそのクラスの生徒の生活指導のことで相談を受け、作文を示して応じたことがあった。誤解も解け納得もいったようだった。

△その三▽親子の間の新しいあり方を模索し家庭教育に生かす。

これは、作文によって生徒と教師とが結びつくというだけでなく、親と教師とが結びついて一緒になって生徒のことを考えてやる上に効果があるということでもある。

「うちの子供はどうも近頃は私どもの言うことを聞きません。しっかり叱ってやってください。」

「近頃は親も子も対等に話し合うものだそうですが、うちの子どもどうも親に相談しようとしません。こちらから言い出せばすぐ腹を立てて飛び出します。どうしたものでしょう。」これらはPTAなどでよく聞かされる親の愚痴である。ひどいになると、

「親の意見を聞こうともしないでとんでもないことを言い出しました(または、しでかしました)。学校で何を勉強してるんでしょ。」と馳け込んでくる父兄もある。これを生徒の立場を基準にして言えば、「反抗期」の特長でもあろうし、一面的には「若さの勝利」とも言えよう。が、ここでその生徒の内面まで知っていなければ何ら相談に応ずることはできないし、できても一般論でしかなく、生徒を育てる道は何ら生み出せないだろう。そこで、作文によりその生徒の物の考え方を始め、その人となりを把握しておくことが役立つのである。自信をもって相談し合うことができるのである。もちろん、その作文は、「我が父(または母)を語る」「私の家庭」などの、家庭について語ったものだけとは限らない。「愛情について」でも「近頃私の思うこと」でも「初夏」でもよいのである。

もっとも、それらの作文に表現されているところをもとにして話していると、問題の多くは、親の方が先に「感情に走る」ことに起因しており、あるいは、親の意見は自己中心的で、いつもそれを押しつけるというところから発しているようである。だから、時々「親と教師が協力して生徒を指導するのではなく、生徒と教師で親を教育しなければならぬのではなからうか」と、そんな考えが私の頭をかすめたりするのである。ともかく、生徒をはさんでPとTとが結びつくことに、作文は大いにプラスになるのである。

△その四▽「文集」によってお互に高め合うことができる。

作文は文集に編集することによって最もよく生かされると思う。それは、文集をきっかけとして、生徒同志が互に感想・意見を交換し合い、そして認め合ったり批判し合ったりする機会を把握するから

である。そこから相互の力で人間性を高め、清め、豊かにし合うからである。もちろん、それは全員が自分の所感、主張を包み隠さずに表現し、しかし他の意見をもよく理解しようとする包容力を持つてきた上でのことである。

しかし、押しつけてはならないと言いきかせ、慎重に事を運ばねばならないと構えていた私は、遂に一度しか文集を作れなかった。一年の担任クラスで二、三人の生徒と話し合ったことを、学年末も近づいた時にそのうちの一人がホームルームで発案して、多数決で難なく決定したものである。ところが二年の担任クラスでは、既に文集を作ったことに喜びを感じ、意義を認められた者からの発案に対して、他クラスから来た未経験の者と、かつての文集に恥じらひを感じた若干名の者が半々に別れて対立し、どちらも譲歩しようとはしなかった。私は、金もかかることだし、無理はすまいと採決したものである。

実際に金はかかった。(昭和三二年二月当時、タイプ印刷六十ペーじで一部百五十円であった。) ガリ版文集や壁新聞の形であれば、労力だけで大した金銭は要さないのであるが、高校生の多くはそれを歓迎しない。彼らはそれを今は幼稚なものと思なし、更に高度なものへ飛躍したいと望むのである。むろん、形式より内容を重んじて、壁新聞を作るような空気を生み出すのが私たち教師の務めであるかもしれないが、そこには別な面からの欠陥が生ずる恐れもあるから注意しなければならない。つまり、一学級だけで作っても、そこから奇妙な優越感を味わわせることになりがちなのである。生徒たちにそうした特殊を好ませてはならない。

「文集」による効果は、こうした欠陥に陥ることを警戒しさえす

れば、確かに上がるのである。私には一度だけの体験だが、文集ができた後、お互がかなり理解し合い、遠慮を解いて批評し合うようになり、やがて男女の相方から話し合う機会を持つようになってきた。もちろん、自分たち自身の生活について、それを固苦しい場面ではなく、話し合おうとするのである。ただし、私はそれを歓迎しながらも無条件には喜べなかった。文集を作る際、多くの者は詩歌俳句をはじめ題名・カットの募集にも応じて、相当な熱意を見せたのであるが、中には無理をしてクラスの調和を保った者もあったのである。私自身で費用を負担して他の者には内緒で与えられた者も三名あった。(後になって三人とも支払いはしたが、) 私にはその生徒たちをこそ何とかしてやらねばならないという気持ちの方が強く動いていた。

結論として、私は、多々困難な点はあるけれども、できるだけのことはして文集を作った方がよいと思う。あるいは文集に代わる「クラスのエッセイ」を輪番に一冊のノートに記していく方法でもよい。少なくとも、相互に話し合える雰囲気の中で、生徒たちを学ばせるべきだと思う。

十、おわりに

人間に、何故点数をつけねばならないのだろうか。人間に、どうして序列をつけねばならないのだろうか。もちろん、金は持たないより持った方が(少くとも今の社会では)よかるう。早く走れないより早く走れた方がよかるう。通知表の成績は悪いより良い方がよいし、経験は積まないより積んだ方がよい。だが、年令が高いから

低いからといって、人間としての存在価値に何ほどの差があるのだろうか。金を持たない者、運動能力の乏しい者・成績のよくない者は存在価値がないと、誰が言えるだろうか。点数をつけるとすれば、それは「才能と努力」に対する報酬でありさえすればよい。序列をつけるなら、それは「努力」への激励でありさえすればよい。作文についての点数・序列も例外ではない。(私たちへの点数・序列も「才能と努力」への報酬であり、「努力」への激励であればよいのであって、人間としての存在まで規制されるものであっては我慢ができない。) 少くとも、競争心を煽るあまりに、他人を引き落とすでも上に立とうとするような人間は作らないようにしよう。それは「人間形成の国語教育」の目標に最も逆らうものであり、「作文教育」に限らず、全教科を通じて最も恐れねばならない点である。私たちは、ただただ、生徒たちが確固たる足どりを以って成長するよう祈って「作文教育」を押し進めよう。

学級文集を編集する時、数名の委員が一編の作文を見せて私にこう言った。

「この作文は中学時代の教科書に出ていた文章のまゝですよ。」
そして、こう冷やかされたものである。

「先生もウカツでしたね、まじめくさって批評しておられる。」
私は、くやしき・はがゆさきの中で考えさせられた。点数は全然つけないと明言して書かせているのにならして他人の文章を盗んでくるのかわからなかった。委員の中には、

「気にする必要はありませんよ、たった一人なんだから。それに、こんなことをした者はいつか後悔しますよ。」

と言う者もあった。

多数の前進のために「たった一人」を無視するか、それともその一人を救うために多数の歩みを一まず止めるか、今でもジレンマに陥ることがよくある。

私には失敗も多々あった。不十分な点ももちろん多い。わからずに困っていることもある。ただ、今までの実践の中からはっきりした範囲内で整理してみたかった。教職について満六年になろうとしている。薄いのか濃いのか、今までの足跡を、とにかく明日からの実践のために、ふり返ってみたかった。猪のように突っ走ったようにも思われるので、一層その必要を感じた。そして、できることなら、実践の中から理論が生み出せれば幸いだと思った。

理論を実践に移すこともあってよいのだが私にははっきりした理論もなかったし、何よりも実践に即さない理論を実践に応用する時の危険を恐れた。だから、このレポートも実践が先行した。もちろん考えながら歩くつもりではあった。つまり生徒との実践の中から理論を教えてもらおうという立場をとってきた。しかし、作文教育についての理論があまたの有名人・無名人によりさまざまに説かれていることから当然とも言えるのだが、最高絶対の理論(しかも実践に即した)は容易に得られない。それでも私は、より確かな理論を得るために、より具体的理論をつかみとるために、これからも実践を積み重ねていきたいと思う。このレポートも、実践の初段階を初段階のまゝに整理して、より確固たる理論に近づきたいと思うところから記したものである。

残念なことに、仲間といっしょに実践することができなかった。

仲間が拙って実践した方が作文教育の効果も上がることは言うまでもない。国語科の全負がいっしょにやってもよし、担任が打ち揃って行なってもよい。私は同学年担当の国語科教師が共に実践する態勢はとってきたが、共に研究するところまでではできなかった。

職員室では試験のたびに答案の文章のまずさが嘆かれる。誤字が多い、脱字も多い、文章も筋が通っていないと言うのである。実際に、英文を訳した答案では日本語を知っているのだからかと疑がわしくさえなり、英語科教師だけでなく、国語科の私たちさえ、手伝って悩まされるのである。

だが、それだからといって、生徒だけを責めるのは片手落ちなのである。答案を書かせる前に、私たち教師（小学校から大学まで含めて）の書いた問題の文章（ないしは引用した文章）を点検してみなければならぬ。そこには、漢文や古典は別として、当用漢字以外の漢字がふんだんに用いられ、また一方では当用漢字の許容項目にもない略字が盛んに使われているではないか。更にかなづかいも旧かなづかいのままになっているのである。しかも、私の周辺では、それらはほとんど何らの抵抗感もなく書かれているのである。私はまずこういう私たちの仲間のあり方から考え直さねばならないと思うのである。そして、生徒たちとの実践の中で、お互に生活を磨き上げていきたいと思う。

私たちの仲間がみんなで作文教育を押し進めていく時、取り締りというワクの中で生活補導する必要はなくなるであろう。いわば伸び盛りの生徒たちに対して、たとえば暴力への萌芽を切るという立派な名目によって、重々しい抑制を加えたり、嚴重な手枷足枷をはめるという補導の仕方は望ましいものではあるまい。私たちは作文に

より生徒たちの生活の夷蕪——物の見方・感じ方・考え方を知り、正當な方向づけと積極的な援助を与え、生徒たちの生活を生徒たち自身の心と体によって築き上げさせよう。

私は、生徒たちを、自由な空気のの中で伸び伸びと学ばせたい。生徒たちが相互に批評し合える雰囲気の中で、生徒たち自身によって人間性を高めさせたい。（おわり）（384頁）

（注）6・森久保仙太郎「評語の書き方」（「作文教育講座」第四卷所収）（熊本県入代高等学校教諭）